

特集 タマネギの生産高度化技術

早生タマネギにおけるネギアザミウマ薬剤防除体系の確立

ネギアザミウマの増殖に好適な環境となっている早生品種のタマネギを対象に、幼虫の増殖期である11月と翌年3月に薬剤防除を行うことで、収穫時のネギアザミウマの密度を大幅に抑制することができた。

内容

2020年、県下のタマネギ産地でネギアザミウマが媒介するアイリス黄斑ウイルス（以下、IYSV）による病害の多発事例が相次いだ。主要産地では、従来の主作型で栽培される中晩生品種よりも収穫時期の早い早生品種の栽培面積が増加しており、これまでの調査で、早生品種は、本虫にとって好適な越冬源となっていること、IYSVの保毒虫が定植期から収穫期まで継続して存在し、潜在的な感染源となっていることを明らかにした（本誌2024年2月号参照）。そこで、中晩生品種への感染拡大を防止するため、タマネギ早生品種における、ネギアザミウマの発生実態に応じた効率的・効果的な薬剤防除体系の検討を行った。

ネギアザミウマは、定植直後(11月)の早生品種圃場に飛来して増殖した後、冬期にも密度を維持し、春期(3月)の気温の上昇に伴ってさらに密度が増加する（本誌2024年2月号参照）。

そこで、本虫の密度が増加する定植直後及び春期を重点防除時期とし、①定植後防除区、②春期防除区、③定植後+春期防除併用区、④無処理区を設けて、収穫期における密度を比較した（各区30株、3反復）。供試薬剤は、主要産地の栽培層にも採用されており、室内検定（本誌2021年11月号参照）でも高い殺虫効果が認められたアセフェート水和剤（2023年11月22日散布）及びフルキサメタミド乳剤（2024年3月10日散布）を用い、常用希釈倍数に調整後、200L/10a相当を散布した。

結果、収穫期（2024年4月10日）におけるネギアザミウマの密度は、①定植後防除区では対無処理比50.1%、②春期防除区では同比24.8%となり、春期に防除を行う方がより高い防除効果を得ることができた。さらに、③定植後+春期防除併用区では、同比9.1%と大幅に密度を抑制することができた。

以上より、早生品種のタマネギ栽培においては、定植後（11月）と春期（3月上旬）に防除を行うことで、ネギアザミウマの密度を大幅に抑制することが可能であると考えられる。

今後の方針

本成果をJAの防除層に反映

したことで、IYSVによる病害の発生を抑制することができたが、ネギアザミウマは雑草も含めた様々な作物に寄生するため、引き続き関係機関と連携しながら地域全体で密度を下げるよう注意喚起を行う。

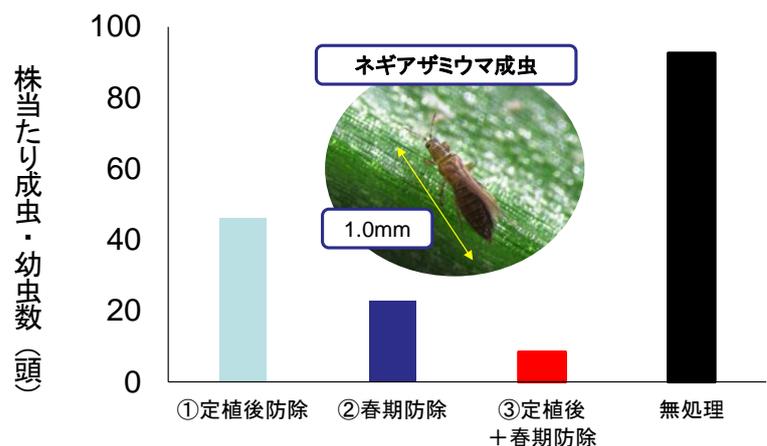


図 早生タマネギにおける薬剤散布時期によるネギアザミウマ防除効果の比較（収穫期調査）

※薬剤使用時は最新の登録内容を確認してください

富原 工弥（病害虫部）